校園長室から

学校教育目標

共に学び共に伸びる子ども

・いのちを大切にできる子ども　・だれとでも仲良く協力し合う子ども
・意欲をもち学習する子ども　・ねばり強くはたらく子ども

令和８年 10 月８日 第 121 号

さらば小樽

「どうしても先生になりたい」と採用試験を受け続けるもなかなか合格できず、倍率の低い北海道を受験することに。数えれば 35 年も前の話。世はバブル全盛。アルバイトも順調で財布は、お札でパンパン。飛行機のチケットだけを用意して、到着した千歳空港のカウンターで「札幌でホテルありませんか」と尋ねると、「札幌はいっぱいで小樽にならあります」との答え。

人生初めての小樽の町へ。銭函駅に近づくと右手には、日本海の荒波。今にも電車にかかりそうな勢い。

降り立った小樽の町は、過去の栄光がかすんで見える寂しい空気。また、それが旅情をくすぐり、たちまち町の魅力に取りつかれたのでした。何気なく入った居酒屋で、「大阪から先生になるために来た」なんて言うと、他のお客さんも一緒になって騒いでくれて、「イカそうめん食べたことない」というと、目の前でイカを調理してくれて、それの美味いのなんの。緑色したエビの卵の軍艦巻き、ホッケの開き…。

そんな思い出を背負って再び小樽の町に。

飛び込んだ寿司屋は閑散として、いやな雰囲気。メニューを見るとサバが１貫で 400 円。超高価。食べるものすべてがインバウンド価格。

そういえば、昼間に観光バスの大群がたくさんの外国人を乗せて走っていました。町のあちらこちらでは、聞きなれない外国語ばかりで、賑やか。

かつての情緒も吹き飛んでいました。

小樽文学館に入るとそこには、かつての静寂が残っていました。少しほっとしましたが、ただそれだけ。町全部がインバウンド仕様。

もう小樽に行くことはない。さらば、小樽。